

原著

他者に対する尊敬を高める介入法が攻撃性を低減させる効果の検討

二神佳代・石村郁夫*

Effects of Intervention to Increase Respect for Others on Reducing Aggression

Kayo Futagami, Ikuo Ishimura

Abstract

In recent years in Japan, respect for parents and teachers, has declined. Simultaneously, instances of domestic violence and violence against teachers have been increasing. With respect to aggression, although efforts to enhance self-esteem have previously been made, efforts to enhance feelings of others' worth have not been made. Therefore, in this study, we conducted interventions to increase respect for others and investigated what kind of results they achieved in reducing aggression. We also focused on their closeness with others in this intervention. Results indicated that significant outcomes were not observed with respect to aggression reduction, but compared with the control group, for the intervention group, there was a tendency for feelings of respect for others to increase after one week and three week intervals.

This, however, does not lead to a reduction in aggression according to this study. Due to increased feelings of respect toward others that arise as a result of the interventions performed in this study, we assume that outcomes of people noticing the good aspects as well as feeling a betterment of relationships with others.

Keywords : respect for others, intervention methods, aggression

問題と目的

杉江(2006)によると、今日まで“尊敬”に関する実証的研究は極めて少なく、1995年以降に国立国会図書館に収蔵された雑誌論文の中で、尊敬をキーワードにする実証的研究はわずか3編にすぎず、その他に世論調査などに尊敬の項目を加えたものや若干の論説を見出すことができるのみであったことが報告されている。また、代表的な心理学事典(梅津・相良・宮城・依田, 1981; 依田, 1977; 中島・安藤・子安・坂野・重耕・立花・箱田, 1999; 久世・斉藤, 2000)と心理学ハンドブック

(東・繁多・田島, 1992)の索引で“尊敬”という語はなく、また社会学事典(見田・栗原・田中, 1988; 森岡・塩原・本間; 1993)にも“尊敬”の語は見当たらない。唯一、哲学辞典(林・野田・久野・山崎・串田, 1971)でのみカントのドイツ語で尊敬の意味を表す“Achtung”の短い解説のみ、見出されたと述べている。このように、心理学、教育学、社会学、また看護学や人とかかわるヒューマン・ケア領域を含めて、これまで、我が国に於いては、尊敬にまつわる研究はあまりなされてこなかった。

* 東京成徳大学応用心理学部 (Faculty of Applied Psychology, Tokyo Seitoku University)
受稿 2014.3.13 受理 2016.2.1

この理由としては、杉江(2006)が論じているような“儀礼的な尊敬”という要素があるのではないかと考えられる。すなわち、“尊敬”というと、戦前の教育のイメージを抱きやすいとされ、それを一掃した戦後の教育では、忠誠心、孝行心を避ける風潮があったため、尊敬も公の場で語られなくなったのではないかとしている。また、もう一方では尊敬という要素があったとしても、それを類似的な概念で研究がなされていたのではないかと考えられる。これに関して、杉江(2006)でも、日本では尊敬の中に好感、愛着という要素が強く入り込んでいる可能性が高いということを述べている。

そうした中で、諸外国と日本の尊敬を比較した調査が近年なされている(服部, 2011; 日本青少年研究所, 2009)。世界20か国の高校生を対象にした調査(服部, 2011)では“先生を尊敬するか”という質問に対して、“尊敬する”と回答したのが、アメリカが82.2%, 中国が80.3%, 韓国84.9%で、それぞれ80%以上だったのに対して、日本は21%であった。また、日本青少年研究所(2009)によると、日、米、韓、中の中学生と高校生を対象とした生活と意識調査で“親を尊敬している”という質問に対して、“全くそうである”と回答したのが、アメリカ、中国の中学生、高校生が60%以上だったのに対し、日本は中学生、高校生共に約20%であった。また、“全くそうである”と“そうである”の回答を合わせた合計でも、日本が中学生、高校生共に最も低かった。さらに、服部(1993)の調査でも、親に対して尊敬する割合が世界の平均が83.6%だったのに対して、日本は25.2%であった。

このように、日本は諸外国に比べて尊敬が低くなってきている傾向があることが分かる。では、なぜ日本は諸外国に比べて、尊敬が低下しているのだろうか。山岸(1998, 1999)は、日本のような同質性の高い文化は、深刻に相手を評価しなくても生活していくことができる関係にあるので、深

い理解をかわしあう対人関係が形成されにくいのではないかと指摘している。また、速水(2006)においても、近年、人間関係の希薄化により他者のよい面を見出す機会が減少したことや、人を軽く扱う風潮により他者を尊敬せず見下すようになったことを指摘している。

そのように他者を尊敬できなくなっている風潮は身近な他者に対しても顕著に表れており、それが攻撃行動の増加といったかたちで表れている可能性も考えられる。近年の家庭内暴力の認知件数においては、2000年までが1,000件以下だったのに対して、2000年以降は、1,000件を超え、2013年には1,806件(前年比11%増)であった(法務省, 2014)。また、対教師暴力は、2008年度の8,120件以降8,000件台を超えており、2013年度には、9,743件と9,000件台に至り増加傾向にある(文部科学省, 2014)。

ヒューマン・ケア領域では、小川(2009)は、対人援助従事者がバーンアウトに陥ることを通して、利用者に対して否定的、批判的な態度が増加するということを述べている。また鎌田(2014)は、被虐待児をケアする病棟看護師を対象に、子どもとの関わりの中で感じる認知や感情を調査しており、その中に“子どもの言動に怒りや苛立ちを覚える”、“子どもに関わりたくない”、“子どもを可愛いと思えない”といった子どもへの拒否感・嫌悪感といったカテゴリーが抽出されたことを示している。

また一方で、蕨岡・鎌田・亀島(2008)が行った、対人援助職を希望する社会福祉学科、臨床心理学科の学生を対象と一般職を希望する経済学科などの学生の攻撃性を比較する調査では、攻撃性の情動や認知といった特性的側面に違いは見られず、対人援助職を希望する学生であっても、眼前にある出来事に対して攻撃的な認知を抱いたり、攻撃的な情動を発したりする傾向が必ずしも低いという訳ではないということが述べられている。

以上のように、ヒューマン・ケア領域でも、攻撃的な認知を抱きやすくさせる背景要因があり、攻撃性を低減させる予防教育の必要性があると考えられる。

以上のような問題がある中で、攻撃性を低減させるために、ライフスキル教育が取り入れられている例もある。ライフスキルとはWHOの定義によると、“日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力”とされる。その一つに“情動への対処”があり、これは怒りや悲しみなどの情動に適切に対処する能力を指す。そしてライフスキルを効果的に獲得し、応用すれば、自己効力感、自己信頼感、自尊感情にも影響するとしている(WHO, 1997 JKYB研究会訳 1997)。ライフスキル教育を実施し、自尊感情を高める取り組みの具体例として、生徒に自分の強みを表現した自画像を描かせて無記名で貼り出し、だれがその絵を描いたかを投票させるといった方法がとられている。このことによって客観的に自分の強みを知り、またクラスメイトが自分をどのように評価しているかを知ることができるとしている(山崎・島井, 2002)。しかし、自尊感情を高めることだけでは、攻撃性の抑制に必ずしも繋がらないという指摘もある(Baumeister, Smart, & Boden, 1996)。さらに、Baumeister, & Boden (1996)は、多くの犯罪者が非常に高い自尊感情を持っており、自分の優越や優勢を証明したり守ったりするために他人に与える害を気にしないことを明らかにしている。Baumeister (2001)は、この問題について、自分達とは異なったり劣ったりする人への軽蔑の感情があり、他者を評価し、尊敬することの欠如が懸念されると指摘している。

Hwang (2000)は、こういった指摘を受けてアメリカ文化における自尊感情の過度の促進を問題とし、他者を受け入れる態度である他者尊重(other-esteem)という概念を提唱している。

Hwang (2000)は他者尊重について“全ての人間を、尊重し、受容し、思いやり、価値あるものとし、奨励すること”、“全ての人々を平等に受け入れるという心的態度である”と定義している。我が国においては、石川・石隈・濱口(2005)がHwang (2000)の他者尊重をモデルに、“他尊感情”という概念を提唱した。この概念は“自分以外の他者を尊敬し、価値ある人間として考える肯定的態度”と定義されており(石川他, 2005)、この概念は人格特性であること、他者を尊敬する要素を含んだ包括的な概念であると言及している。

また、桜井(2009)の事例研究では、スクールカウンセラーなどの支援者が、攻撃性の高い中学生を対象に面接中にポジティブな面に着目して褒めたり、劇団といった学外の活動に参加する取り組みを行っている。その結果、自尊心の回復、やる気がうまれるなどの士気高揚、他者とのつながりの実感を示す社会的統合感などの情緒的ウェルビーイングを向上させ、結果的に攻撃性を低減させている。この桜井(2009)の取り組みの中では、自尊感情と共に、他者とのつながりを向上させる介入をしているが、他尊感情に焦点を絞ったと言えるものではなかった。さらに石川他(2005)によると、他尊感情が低い傾向にある人は攻撃的な表現が高いということが分かっていることから攻撃性の低減には他者尊重の態度が関連していることが伺える。以上のように、これまで攻撃性の問題に対して自尊感情を高める取り組みは行われてきたが(山崎・島井, 2002)、他者尊重の重要性が指摘されているのみで実際にそれを高める取り組みは行われてきてこなかった(柴山・武藤・五十嵐, 2011)。

そこで本研究では、他者に対する尊敬を高める介入法を開発し、それによって、攻撃性低減にどのような効果があるのかを検討するということを目的とする。

尊敬を高める介入をするにあたり、これまで明

確化されてこなかった以下の二つを定義として含める。まず、尊敬の対象である。従来の尊敬の定義には、資産家や有名人のような会ったことのない対象や抽象的な対象が含まれていたが(李・横山, 2002), 本研究ではまず尊敬の対象を親, 教師, 友達など普段の生活で会っている身近な他者を対象にしたものを指すこととした。次に, これまでは, 尊敬は人格特性として扱われ, 操作可能でないものとされていた(西尾・岩淵・水谷, 1983)。また武藤(2012)は, これまで尊敬については態度か情動かということについて議論されてきていることを述べており, その中で感情を情動として捉えている Li & Fischer (2007) の“感情尊敬”は評価が変われば変動する情動状態として紹介している。この“感情尊敬”は, “優れた他者に対する憧れや称賛の意味合いを強く含んだポジティブな自己意識的情動”とされている。本研究でも尊敬を尊敬している“状態”と定義し, 介入することで操作可能なものとする。そういった視点を導入した土台の上で, 本研究では, 尊敬を Hwang (2000) の他者尊重を参考にして, “親や友人など普段の生活で会う身近な他者に対して, 尊重し, 受容し, 思いやり, 価値あるもの”と定義し, 他者承認としての尊敬とした。

以上のことから, 本研究では, 1週間にわたるワークを用いた身近な他者に対しての尊敬を高める介入を行うことで, 攻撃性低減にどのような効果があるかを検討する。それに加えて, 本研究では, 石川他(2005)などの先行研究で検討されている, 他尊感情, 自尊感情への効果, さらに仮想的有能感, 被受容感についても, どのような効果を及ぼすかを検討し, それと同時にそれぞれの要因が尊敬(他尊感情)とどのように関連しているかを検討することを目的とする。仮想的有能感については, 問題で述べたように, 尊敬の低下と関連して論じられていることから検討することにした。被受容感については, 周囲に対する感謝の念

や周囲から受け入れられている感覚が生じるようになるといった看護学生に対して行った内観療法の報告(増田・大山, 2005)を参考にして, 本介入でも他者から受け入れられている感覚が生じるようになるか, 効果を検証するために被受容感を取り扱うこととした。

方法

調査協力者と時期: 本調査では, 介入群と統制群に分けて, 2012年9月下旬—11月上旬にかけて実施した。具体的な割り付け方法については, 基礎教養科目である心理学の講義をランダムに二つ抽出し, 講義ごとに統制クラスと介入クラスの二クラスに調査を依頼した。それぞれにワークシート, 測定尺度, 同意書などを一括手交した上で, 回答は郵送または手渡しというかたちをとった。なお, 調査にあたっては, 研究実施時に所属していた研究倫理委員会の承認を受けており(承認番号12-1-19), 研究の目的・方法等を十分に説明し, 研究協力者からは同封している同意書の書面にて同意を得ている。介入群は, 大学生42名(男性14名, 女性28名)で, 平均年齢は20.21歳($SD=3.02$)であった。統制群は, 大学生52名(男性20名, 女性32名)であり, 平均年齢は, 19.60歳($SD=0.97$)であった。

調査手続き: 介入群の手続きとして, 以下の資料を協力者に渡し, 回答を求めた。内訳は, ①調査の説明のための資料, ②同意書, ③実施手順についての資料, ④ワークの実施前に回答する質問紙, ⑤ワーク実施から1週間後に回答する質問紙, ⑥ワーク実施から3週間後に回答する質問紙, ⑦ワークシート, ⑧自由記述のシート, ⑨チェックシートとなっている。

ワークシートの構成は以下の通りである。まず1ページ目に, 身近な人で, いなくなったら困る人(大事な人, 大事だった人, この人抜きにしては語れない人)を7人の関係性(続柄)について挙

げてもらい、①—⑦の所定の枠に書いてもらうようにした。関係性(続柄)については、“母親, 父親, 中学校時代の友人 A さん, 同じ学科の友人 B さん etc.” というような例を示した。2ページ目には、1ページ目に書いてもらった①—⑦の順番で毎日1人ずつ、合計7人の尊敬できるところを書いてもらうように教示した。また、“誰に対しても優しいところ”, “自然に感謝の気持ちを持てるところ”のように“尊敬”とはどういうものかについての例を示した。3ページ目には、母親を例にした既に記入してあるサンプルを示した。4ページ目から10ページ目では、1ページ目で挙げてもらった①—⑦までの人の尊敬できるところを、それぞれのワークシートにある所定の枠に5つずつ記入してもらうようにした。

統制群の手続きとしては、“あなたの他者に対する態度に関するアンケート調査”という名前で、介入群で使用したものと同様の尺度が挿入してある同様の質問紙に回答してもらうようにした。またそれぞれ1週間後、3週間後にも同様の質問紙に回答してもらうようにした。

使用尺度：質問紙で使用した尺度は、以下の尺度である。①自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982)：この尺度は、Rosenberg (1965) の“Self Esteem Scale”の10項目を山本他(1982)が邦訳した尺度であり、自分自身についてどのように感じるかや自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚を測定する尺度である。具体的には、“自分に対して肯定的である”, “だいたいにおいて、自分に満足している”といった質問項目から構成されており、5件法で10項目からなる。

②仮想的有能感尺度(速水, 2006)：この尺度は、“自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚”と定義された仮想的有能感について測定する尺度である。具体的には、

“他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる”, “他の人を見ていて‘ダメな人だ’と思うことが多い”といった質問項目から構成されており、5件法で11項目からなる。

③日本版 Buss-Perry 攻撃性尺度(安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井, 1999)：この尺度は、“短気(anger)”, “敵意(hostility)”, “身体的攻撃(physical aggression)”, “言語的攻撃(verbal aggression)”の4因子からなる Buss & Perry (1992) の尺度を安藤他(1999)が邦訳した尺度である。“短気”は怒りっぽさ、怒りの抑制の弱さなどを測定する項目から成り、具体的には“たいした理由もなくかつとなることがある”といった質問項目がある。“敵意”は他者に対する悪意や軽視など猜疑心や不信感を測定する項目から成り、具体的には“嫌いな人に出会うことが多い”といった質問項目がある。“身体的攻撃”は、暴力反応傾向、暴力への衝動、暴力の正当化などを測定する項目から成る。具体的には、“人をなぐりたいという気持ちになることがある”といった質問項目で構成されている。“言語的攻撃”は、自己主張、議論好きなどの言語的な攻撃反応を測定する項目から成る。具体的には、“誰かに不愉快なことをされたら不愉快だとはっきり言う”といった質問項目から構成されており、5件法で24項目からなる。

④他尊感情尺度(石川他, 2005)：この尺度は、“私は、人の個性を理解し、それぞれに価値があると思う”, “私は、どんな人も生まれてきた以上は価値があると思う。”などの質問項目から成っており、“全くあてはまらない”, “あてはまらない”, “どちらとも言えない”, “あてはまる”, “とてもあてはまる”の5件法であり、11項目からなる自分以外の他者を尊敬し、価値ある人間として考える肯定的態度を測定する尺度である。

⑤被受容感尺度(鈴木・小川, 2008)：この尺度は、鈴木・小川(2008)が他者からの受容感として“自

分は人から受入れられている、人とつながっているということに根ざした肯定的な感情”と定義したものに該当する質問項目で構成されており、具体的には、“私は周りから受け入れられていると思う”、“私は優しい人に囲まれて1人ではないと思う”といった質問項目から構成されており、5件法で7項目からなる。以上の5つの尺度を①—⑤の順に掲載し、回答を求めた。

結果

各変数の相関分析 各従属変数の相関分析の結果と記述統計量を Table 1 に示す。相関分析で扱ったデータは、介入群と統制群を含めたものであり、全て介入前のデータである。

他尊感情に関しては、自尊感情と0.1%水準で有意な正の相関が見られ ($r=.456, p<.001$)、被受容感とも0.1%水準で有意な正の相関が見られた ($r=.542, p<.001$)。仮想的有能感とは1%水準で有意な弱い負の相関 ($r=-.291, p<.01$) が見られた。全攻撃性とは0.1%水準で有意な弱い負の相関 ($r=-.386, p<.001$) が見られた。その他の攻撃性については、敵意と0.1%水準で有意な弱い負の相関が見られ ($r=-.388, p<.001$)、身体的攻撃とは0.1%水準で有意な弱い負の相関 ($r=-.337, p<.001$) が見られた。短気とは5%水準で有意な弱い負の相関が見られ ($r=-.225, p<.05$)、言語的攻撃につ

いては有意な相関は見られなかった(言語的攻撃: $r=.108, n.s.$)。

自尊感情に注目してみると、敵意と0.1%水準で有意な負の相関 ($r=-.488, p<.001$) が見られ、被受容感とは0.1%水準で有意な正の相関が見られた ($r=.482, p<.001$)。

言語的攻撃に注目すると、全攻撃性とは1%水準で有意な弱い正の相関 ($r=-.305, p<.01$) があり、その他の攻撃性とは、ほとんど相関が見られなかった(短気: $r=.089, n.s.$, 敵意: $r=-.185, p<.10$, 身体的攻撃: $r=.063, n.s.$)。

仮想的有能感と各変数との相関関係に注目してみると、全攻撃性とは、0.1%水準で有意な正の相関 ($r=.553, p<.001$) がみられ、攻撃性の下位尺度に於いては、以下に示すようにそれぞれ0.1%水準から1%水準で有意な正の相関を示したが、言語的攻撃に関しては、ほとんど相関が見られなかった。すなわち仮想的有能感と短気 ($r=.349, p<.01$)、仮想的有能感と敵意 ($r=.433, p<.001$)、仮想的有能感と身体的攻撃 ($r=.380, p<.001$)、仮想的有能感と言語的攻撃 ($r=.178, p<.10$) という値であった。

二要因分散分析: 介入の有無(介入群、統制群)と時間経過(介入前、介入後1週間、介入後3週間)を要因とした2×3の2要因混合計画の分散分析を行った (Table 2)。

Table 1 各従属変数の相関係数

	仮想的有能感	短気	敵意	身体的攻撃	言語的攻撃	全攻撃性	他尊感情	被受容感	平均	標準偏差
自尊感情	-.005 <i>n.s.</i>	-.207 +	-.488 ***	-.174 <i>n.s.</i>	.366 ***	-.254 *	.456 ***	.482 ***	28.39	7.14
仮想的有能感	—	.349 **	.433 ***	.380 ***	.178 +	.553 ***	-.291 **	-.310 **	28.83	7.85
短気		—	.307 **	.463 ***	.089 <i>n.s.</i>	.778 ***	-.225 *	-.077 <i>n.s.</i>	13.78	4.57
敵意			—	.259 *	-.185 +	.590 ***	-.388 ***	-.657 ***	18.73	4.65
身体的攻撃				—	.063 <i>n.s.</i>	.766 ***	-.337 **	-.102 <i>n.s.</i>	15.22	4.93
言語的攻撃					—	.305 **	.108 <i>n.s.</i>	.195 +	14.64	3.37
全攻撃性						—	-.386 ***	-.279 *	62.57	11.16
他尊感情							—	.542 ***	44.06	5.86
被受容感								—	26.33	5.23

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.10$

Table 2 それぞれの従属変数の群分け、期間ごとの平均値、標準偏差と分散分析の結果

群分け従属変数	介入群 (N=42)			統制群 (N=52)			主効果		
	事前	1週間後	3週間後	事前	1週間後	3週間後	群分け	期間	交互作用
自尊感情尺度	28.94 (8.95)	30.94 (8.62)	30.67 (8.40)	28.77 (5.24)	30.23 (4.90)	29.97 (5.39)	0.94 <i>n.s.</i>	8.46 ***	0.23 <i>n.s.</i>
仮想的有能感尺度	26.83 (8.18)	25.75 (8.55)	25.67 (9.64)	30.55 (6.39)	29.39 (6.29)	30.45 (6.08)	5.21 *	2.84 +	0.93 <i>n.s.</i>
日本版 Buss-Perry 攻撃性尺度	60.94 (11.98)	59.91 (10.94)	59.66 (11.22)	61.60 (9.58)	62.50 (10.39)	62.70 (9.48)	0.68 <i>n.s.</i>	0.10 <i>n.s.</i>	1.72 <i>n.s.</i>
短気	13.39 (4.05)	13.03 (4.51)	13.22 (4.91)	13.71 (5.51)	14.47 (4.93)	14.12 (4.50)	0.67 <i>n.s.</i>	0.22 <i>n.s.</i>	1.69 <i>n.s.</i>
敵意	18.89 (5.43)	17.91 (4.64)	17.66 (5.00)	18.12 (2.99)	17.91 (3.42)	17.53 (3.12)	0.10 <i>n.s.</i>	4.63 *	0.92 <i>n.s.</i>
身体的攻撃	14.47 (4.64)	14.31 (4.13)	14.19 (4.50)	15.35 (4.95)	15.09 (5.67)	15.65 (4.97)	0.90 <i>n.s.</i>	0.34 <i>n.s.</i>	0.69 <i>n.s.</i>
言語的攻撃	14.42 (3.98)	14.61 (4.05)	14.47 (4.42)	14.22 (3.27)	14.88 (2.88)	14.66 (3.02)	0.10 <i>n.s.</i>	1.56 <i>n.s.</i>	0.52 <i>n.s.</i>
他尊感情尺度	45.60 (5.84)	47.11 (6.36)	47.71 (5.15)	43.09 (5.41)	43.85 (5.29)	42.82 (5.10)	7.83 **	4.88 **	4.98 **
被受容感尺度	25.97 (6.09)	26.58 (6.30)	27.33 (6.38)	26.62 (3.98)	26.91 (3.70)	27.50 (4.07)	0.10 <i>n.s.</i>	6.18 **	1.04 <i>n.s.</i>

上段：平均値，下段：標準偏差

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

主効果と交互作用：F=

その結果、交互作用については、他尊感情尺度に1%水準で有意な交互作用が見られた ($F(2, 132) = 4.984, p < .01$)。また群分けでも有意な差が見られ ($F(1, 66) = 7.834, p < .01$)、期間についても有意な差が見られた ($F(2, 132) = 4.878, p < .01$)。

そのため、時間経過の3時点間の変化について単純主効果の検定 (Bonferroni法) を行った。期間では、介入群の介入前と1週間後 ($t = -1.514, p < .05$)、介入前と3週間後 ($t = -2.114, p < .001$) に0.1%水準で有意な差が見られた。他尊感情尺度の群分けでは、1週間後 (介入群と統制群： $t = 3.266, p < .05$) に5%水準で有意な差が、3週間後 (介入群と統制群： $t = 4.896, p < .001$) に0.1%水準で有意な差が見られた。また介入前 (介入群と統制群： $t = 2.509, p < .10$) では10%水準で

有意な差が見られた (Figure 1)。

考察

相関分析についてであるが、まず、他尊感情との相関に注目してみることにする。他尊感情と攻撃性との相関分析から、言語的攻撃以外は有意な

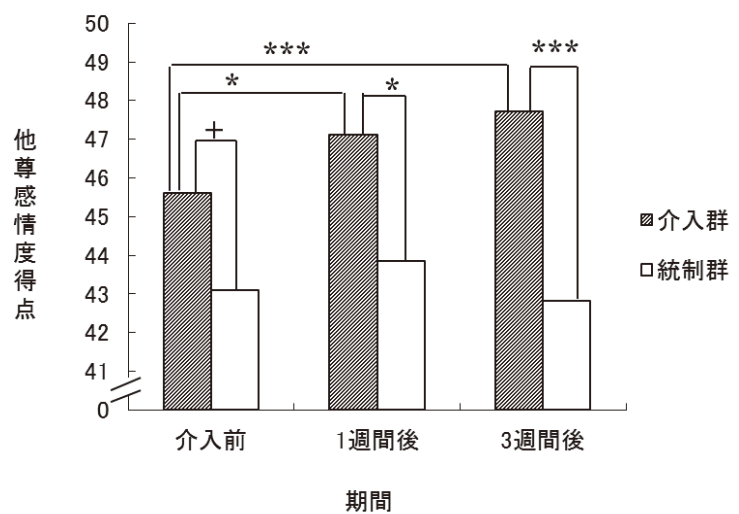


Figure1 他尊感情尺度得点の推移

負の相関を示した。このことから、他尊感情と攻撃性は、負の相関関係にあることが示され、他尊感情が高まれば、攻撃性は減少するという関係が示唆された。ここに言語的攻撃が含まれなかったことについては、既に述べたように、言語的攻撃の質問項目が“誰かに不愉快なことをされたら不愉快だとはっきり言う”といった自己主張、議論好きなどの言語的な攻撃反応を測定する内容となっている。また、言語的攻撃自体も、全攻撃性とは有意な正の相関があったものの、その他の攻撃性(短気、敵意、身体的攻撃)とは有意な相関が見られなかった。このことから、言語的攻撃は、攻撃性とも捉えられる一方、自己主張できるなどのポジティブな内容とも捉えられるため、このような相関になったのではないかと考えられる。

また、他尊感情と自尊感情、他尊感情と被受容感、共に有意な正の相関が見られ、他尊感情と自尊感情、被受容感との正の相関関係が認められた。よって、他尊感情が高まれば、自尊感情と被受容感も高まるという関係が示唆された。

自尊感情に注目してみると、自尊感情と敵意では、他尊感情と同様に負の相関が見られ、自尊感情が高まれば、敵意も下がる傾向があることが示された。また被受容感とも正の相関が見られたことから、自尊感情が高まれば、被受容感も高まる関係が示された。

仮想的有能感と各変数との相関関係との関連を見ると、仮想的有能感と攻撃性は言語的攻撃を除いて、正の相関関係が見られた。既に述べた仮想的有能感の質問項目を見てみると、“他の人を見ていて‘ダメな人だ’と思うことが多い”や“他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる”といった他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚”と定義された内容から、攻撃性と関連していることが伺われる。このことから、仮想的有能感と攻撃性も何らかの関連があるもの

と考えられる。ここに言語的攻撃が含まれなかった理由については、他尊感情との相関のところでも述べたように、攻撃性ともポジティブな内容とも捉えられるところが、仮想的有能感と相関が見られなかったこととも関連しているものと見られる。

以上のように、相関分析の結果から、他尊感情が高まるほど、自尊感情と被受容感が高まり、仮想的有能感、短気、敵意、身体的攻撃、攻撃性全体も低くなる傾向があるということが考えられる。

分散分析の結果では、他尊感情尺度のみ、介入群において、統制群と比較した際、1週間後、3週間後と他尊感情が上がる傾向にあることが示された。

一方で攻撃性に関しては、介入群と統制群では、有意な差は見られなかった。既に述べてきたように、これまでの先行研究では、自尊感情を高めることによって攻撃性を低減させてきた。今回の結果では、介入前に実施した相関分析によって、他尊感情と自尊感情に正の相関が見られたにもかかわらず、自尊感情は介入群、統制群ともに有意な差がみられなかった。このことから、他尊感情だけでなく、自尊感情も高まることが示されれば、攻撃性の低減に中核的な効果が見込まれたのではないかと考えられる。

一方今回の研究では、攻撃性の低減には至らなかったものの、ワークによる介入によって、他尊感情が高まったということには意義があったと言える。問題と目的で述べたように、近年日本は諸外国と比べて先生や親などといった身近な他者に対して尊敬できなくなる傾向があり(服部, 2011; 日本青少年研究所, 2009)、また速水(2006)が述べるように、他者のよい面を見出す機会が減少したこと、人を軽く扱う風潮により他者を尊敬せず見下すようになっている傾向があり、このことから、他者に対して尊敬を高めることができれば、今まで見出すことができなかつた他者のよい面に

気づけたり、他者との関係の改善につながるといった効果は期待できるものと思われる。

本研究の限界と今後の展望

本研究では、尊敬を高める介入が攻撃性低減に及ぼす効果を検証するために調査をした結果、他尊感情以外では、交互作用が見られなかった。また考察でも述べたように、自尊感情が介入群と統制群で有意な差は見られなかったため、自分を大切にすることの取り組みも併せて行うことで、攻撃性に中核的な効果を見込めるのではないかと思われる。また、より多くのサンプル数を用いたり、他の分析方法を用いて介入群と統制群での差がどのようにでるか再度検討してみる必要もあると考えられる。

また、今回は大学生が対象であったが、対人援助職につく人々にとっても、攻撃性のコントロールはとても重要な問題となってくる。今後は、対人援助職についている人に対しても、尊敬を高める介入を行うことで、ケア対象者に対しての認知の変化などを測定していくことも有効であると考えられる。

引用文献

安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子(1999)．日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(BAQ)の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究 70, 384-392.

東洋・繁多進・田島信元(1999)．発達心理学ハンドブック 福村出版

Baumeister, R.F. (2001) . Violent Pride. *Scientific American*, 284, 96-101.

Baumeister, R.F., Smart, L., & Boden, J.M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, 103, 5-33.

Buss, A. H., & Perry, M. (1992) . The aggression questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 452-459.

服部幸應(2011)．第4回 ウィズガス食育セミナー パネルディスカッション「食育の先進事例に学ぶ」 2011年1月29日

<<http://www.gas.or.jp/shokuiku/semina/110130/semina.html>> (2013年1月1日)

速水敏彦(2006)．他人を見下す若者たち 講談社現代新書

林達夫・野田又夫・久野収・山崎正一・串田孫一(編著)(1971)．哲学事典 平凡社

法務省(2014)．平成26年度犯罪白書 平成26年度犯罪白書第3編第1章第4節1

< http://hakusyol.moj.go.jp/jp/61/nfm/n61_2_3_1_4_1.html > (2015年1月9日)

堀 洋道・山本真理子(2001)．人間の内面を探る(自己・個人内過程)

心理測定尺度集Ⅰ 1自己 自尊感情・自己評価 サイエンス社 pp29-31.

堀 洋道・吉田富士雄(2001)．人間と社会のつながりをとらえる(対人関係・価値観) 心理測定尺度集Ⅱ 5対人行動 攻撃・怒り サイエンス社 pp202-207.

堀 洋道・吉田富士雄・宮本聡介(2011)．個人から社会へ(自己・対人関係・価値観) 心理測定尺度集Ⅴ 1自己・自我 自尊感情・自己評価 サイエンス社 pp37-39.

Hwang, P.O. (2000) . Other esteem: *Meaningful life in a multicultural society*. Philadelphia: Accelerated Development.

石川満佐育・石隈利紀・濱口佳和(2005)．他尊感情と自尊感情が自己表現に与える影響 筑波大学心理学研究, 29, 89-97.

磯部美良・菱沼悠紀(2007)．大学生における攻撃性と対人情報処理の関連—印象形成の観点から パーソナリティ研究, 15, 290-300.

- 鎌田佳奈美(2014)．被虐待児をケアする病棟看護師に生じる認知・感情とその変容をもたらす要因 日本小児看護学会誌 **23**, 18-24.
- 久世敏雄・斉藤耕二(編著)(2000)．青年心理学事典 福村出版
- Li, J., & Fischer, K.W. (2007)．Respect as a positive self-conscious emotion in European Americans and Chinese In J.L.Tracy, R.W. Robins, & J.P.Tangney (Eds.), *The self-conscious emotions: Theory and research* New York : Guilford Press pp. 224-242.
- 李仲浜・横山正幸(2002)．日本の小学生の尊敬意識についての研究 福岡教育大学紀要, **51**, 227-236.
- 増田安代・大山真弘(2005)．看護基礎教育における記録内観の試み 九州看護福祉大学紀要, **7**, 59-65.
- 見田宗介・栗原彬・田中久義(1988)．社会心理学事典 弘文堂
- 文部科学省(2014)．「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について <<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001055972&cycode=0>> (2015年1月9日)
- 森岡清美・塩原勉・本間康平(1993)．新社会学辞典 有斐閣
- 武藤世良(2012)．尊敬の教育的機能を探る—「自己ピグマリオン過程」の実証に向けて— 東京大学大学院教育学研究科紀要 **52**, 393-401.
- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・重柘算男・立花政夫・箱田裕司(1999)．心理学事典 有斐閣
- 日本青少年研究所(2009)．中学生・高校生の生活と意識-日本・アメリカ・中国・韓国の比較- 日本青少年研究所
<<http://www1.odn.ne.jp/youth-study/research/2009/tanjyun.pdf>> (2013年1月2日)
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静雄(1983)．岩波国語辞典 第3版 岩波書店
- 小川幸裕(2004)．対人援助従事者におけるバーンアウトの研究：エピソード学習から 帯广大谷短期大学紀要 **41**, 65-74.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. New Jersey: Princeton Univ. Press.
- 桜井美加(2009)．臨床心理学の最新の知見(50) 攻撃性の高い中学生へのアプローチ 臨床心理学, **9**, 423-429.
- 柴山香澄・武藤悠子・五十嵐哲也(2011)．中学生の他尊感情と友人関係の諸側面との関連 愛知教育大学教育創造開発機構紀要, 183-88.
- 杉江修治(2006)．日本における尊敬の社会心理学的検討 中京大学教養論叢, **47**, 245-264.
- 鈴木真吾・小川俊樹(2008)．中学生における自尊心と被受容感からみたストレス反応・本来感の検討 筑波大学心理学研究 **36**, 97-104.
- 梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田新(編著)(1981)．新版・心理学事典 平凡社
- 藤岡幸一・鎌田次郎・亀岡信也(2008)．対人援助職にとって共感性と攻撃性は必要か 関西福祉科学大学紀要, **11**, 297-306.
- WHO 川畑徹郎・西岡伸紀・高石昌弘・石川哲也(監訳) JKYB 研究会(訳)(1997)．WHO ライフスキル教育プログラム 大修館書店
- 山岸俊男(1998)．信頼の構造——心と社会の信頼ゲーム 東京大学出版会
- 山岸俊男(1999)．安心社会から信頼社会へ——日本型システムのゆくえ 中央公論
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子(1982)．認知された自己の構造 教育心理学研究 **30**, 64-68.
- 山崎勝之・島井哲志(2002)．攻撃性の行動科学——発達・教育編—— ナカニシヤ出版 pp194-210.
- 依田新(編著)(1977)．新・教育心理学事典 金子書房